

I. 研究主題

伝え合う力を高める授業の創造

～思考力や想像力を養う表現活動の工夫を通して～

II. 研究目的

1. 主題設定の理由

(1) 研究の経過

第24期（平成24～25年度）

**「確かで豊かな日本語の力をつける授業を創造し、子どもたちが言葉を通して
おもいを共有する力を育む」 ～つけたい力を明確にした授業実践を通して～**

- ①社会の多様性に対応できる児童の育成、学習指導要領の改訂、児童の実態による教育現場の要求、部会員の要望から、新しい研究課題を設定。
- ②「目の前にいる子どもたちの実態から、どんな力をどのように身につけさせるべきなのか」を考え、授業実践を通して探る2年間。

第25期（平成26～27年度）

**「総合的な国語の力を育成する、多彩な学習構成の創造」
～文学的文章を支える「表現のしくみ」に着目して～**

- ①従前の部会研究で積み上げてきた指導観を継承しつつ、「単元を貫いた言語活動の設定」等の新しい指導観を取り入れる試みとして、文学的文章教材の指導における3つの「学習構成モデル」に基づく授業展開、「表現のしくみ」に着目した年間の指導計画作成を柱とした実践の交流。
- ②1年間を見通し、いつ、何を学ぶかを、明確に意識した指導計画および授業作りに取り組み、目の前の子どもたちの実態に応じた「総合的な国語の力」の育成、伸長を図った。

第26期（平成28～29年度）

**「多様な手立てによる『総合的な国語の力』の育成」
～説明的文章教材における「表現のスキル」の習得と活用をめざして～**

- ①第25期の「文学的文章教材」の両翼の一方を担う「説明的文章教材」を扱い、「つけたい力」を念頭に「手立て」を工夫する研究を進めた。
- ②系統立てた指導（『表現のスキル』系統表）、実態の把握、つけたい力とそれに応じた工夫が必要かつ重要であるという認識を部会員で共有することができた。

(2) 主題「伝え合う力を高める授業の想像」について

平成32年に完全実施となる新「学習指導要領」では、今後、児童が「思考力、判断力、表現力」を身につけ、更にその力を伸ばしていくことができる学習活動を創造していく必要がある、とされている。その「解説」によれば、これから生きる子ども達には、「様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくこと」などが求められているという。その上で、国語科では、「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」の育成を目指す、と明記されている。国語科は、「国語で理解し表現する能力を育成する教科」であり、その資質・能力が全ての教科の基本となり、これからの社会を生き抜く上でも重要な力だからである。

新「学習指導要領」における国語科の「目標」は、次の3つである。

- | |
|--|
| <p>① (知識・技能等) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。</p> <p>② (思考・判断・表現等) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。</p> <p>③ (学びに向かう人間性等) 言葉のもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の態度を養う。</p> |
|--|

過去4年間の研究を振り返ると、①にあたる「国語の特質(言葉の使い方、情報の扱い方などの知識・技能)を身につける学習」に取り組んだ、と考えられる。

そこで、第27期は、目標の②にあたるであろう「言葉によって自分の考えを形成したり、新しい考えを生み出したりすること＝言葉のよさ」を気づかせる授業、更に、「互いの考えや立場を尊重(＝自他のよさに気づく)」し、「言葉を通して正確に理解したり表現したりすること＝伝え合う力」を高めていく授業を目指すべく、「伝え合う力」という文言を主題に設定した。国語の大切さを自覚し、国語に対する関心を高め、話したり聞いたり書いたり読んだりすることに興味を示し、言葉のよさに気づく子どもを育てていきたい。

(3) 副題「思考力や想像力を養う表現活動の工夫を通して」について

第25・26期で、6年間を見通しての系統的な指導事項(『表現のしくみ』系統表、『表現のスキル』系統表)の活用)を柱とした授業作りについて研究してきた。その中で、目の前の子どもたちの実態に寄り添った指導計画を作る重要性や、国語科の学習内容が「系統的・段階的に上の学年につながっていること」、「繰り返しながら資質・能力の定着が図られていくこと」などが、改めて確認された。

一方、次年度以降の研究内容について、部会員から寄せられたアンケートの回答からは、『読み取り』→『書く・話す』の流れになっているものの研究をやりたい、「『読む』→『書く』への接続を研究したい」など、「読み取り」から「表現」への発展・活用の手立てを研究することへのニーズの高まりを感じた。

そこで、「これまでの学習で学んだことや身につけたことをどのように活用していくのか」という課題を持って、「言葉を大切にしながら、論理的に思考する力や、豊かに想像する力を養うことができる「表現活動」」を工夫していく、という副題を設定した。教材文を読み取る学習活動の中で身につけたことを基にした「表現活動」(書く・話す等)について研究を深めていきたい。過去4年間の研究が知識・技能のインプット(習得)だとすると、今期は知識・技能をアウトプット(活用)すると、とらえてもらいたい。

ただし、活動するだけの学習(活動ありきの指導計画・活動させて満足してしまう学習)で終わらないよう、子ども達が読み取り場面で身につけた知識・技能がどのように表現活動に生かされているのか、を明確にするとともに、その活動によって、子どもたちがどんなことができるようになるのか、を見通した指導計画を作成することが重要である。

2. 目指す子ども像

- | |
|---|
| <p>(1) 言葉を通じて相手と関わることで、自他のよさに気付くことができる子ども</p> <p>(2) 互いの立場や考えを尊重し、言葉を通して適切に表現できる子ども</p> |
|---|

3. 研究仮説

言語を手掛かりとした論理的に思考する力や豊かに想像する力を養う表現活動を工夫することにより、児童に伝え合う力を育てることができる。

III. 研究内容

1. 研究領域

「読むこと」領域の「文学的文章教材」における「表現活動」場面

なお、1年次目は「文学的文章教材」、2年次目は「説明的文章教材」を取り扱うことで、読むこと領域の表現活動を網羅する。

2. 研究の柱

- (1) 「思考力、想像力」を高めるための表現活動の実践
…「表現のしくみ」系統表の活用を通して
- (2) 6年間の指導事項の系統性を念頭においた、身につけさせたい力を明確にした学習指導

3. 教育課程研究

教育課程委員研修会において、第27期研究の一環として、第二次研究協議会で扱う教材以外についての「言語活動例」を試作し、部会員に配付する（予定）。

IV. 研究方法

1. 平成30・31年度の2ヵ年計画で行う。
2. 中心サークルを設け、石教研第二次研究協議会において授業提言を行う。ただし、各市町村第二次研究協議会における授業公開および石教研第二次研究協議会での提言を行う学年と教材については、討議の場での共通理解を図るため、原則次の通りとする。なお、授業を行う学年の指定は行わない。

学年	教材名	予想される表現活動
1年生	うみへのながいたび りすのわすれもの	おもしろかったところのお話会をする。 お気に入りの本を紹介する。
2年生	わにのおじいさんのたからもの かさこじぞう	話の続きを書く。登場人物の紹介をする。 音読発表会をする。ペープサートで演じる。
3年生	わすれられないおくりもの モチモチの木	物語を紹介する。 おすすめ図書カードを作る。ポップを作る。
4年生	一つの花 ごんぎつね	感想を友達に伝える。物語の秘密（優れた表現）をさぐる。読書発表会をする。
5年生	大造じいさんとがん 雪わたり	立場を決めて、話を書きかえる。 図書推薦会を開く。
6年生	川とノリオ きつねの窓	感想を話し合う。おすすめパンフレットを作る。 1年生に向けて物語を書く。

3. 各市町村サークルは、主題の解明を図るために、以下の要領で部会研究を進める。
 - (1) 授業学年の文学的文章教材について、「どの教材でどのような力を身につけさせたいか」また「どのような言語活動がふさわしいか」を、児童の実態を鑑みながら検討し、年間指導計画を作成する。
 - (2) 年間指導計画に沿って、公開授業単元の学習構成を検討する。
 - (3) 授業公開後、事後研を持ち、提言をまとめる。
*年間指導計画、指導案形式、提案の形式については新年度発行の「研究ガイド」に掲載する。

4. 実技理論研修会を開催し、今研究に関わる学習および日常の実践に生きる学習の場を設定する。
5. 第25期に作成した『表現のしくみ』系統表を改訂し、年間指導計画作成の際に役立てられるよう、HPにも掲載する。

V. 研究体制（組織・運営）

1. 研究中心サークルを、研究1年次目の平成30年度は北広島市、研究2年次目の平成31年度は江別市とする。
2. 分科会構成は、低・中・高の3ブロックとする。分科会での研究協議は、中心サークルの授業提言の他、各市町村サークルの提言を主とするが、個人レポート提言も受け付ける。また、分科会協議の深化を図るため、各市町村の提言状況やレポート数によって時間配分を考慮する。
3. 推進委員研修会（部会役員・各市町村の推進委員）を組織し、研究計画の具体化や石教研第二次研究協議会の運営等について協議する。
4. 定期的に部会報「はまなす」を発行し、研究内容や各種研修会の周知等に努める。
5. 不定期に「研究ガイド」を発行し、部会研究の取り組みの向上と焦点化を図る。

VI. 年間計画

時期	研修会名・事業名	内 容
4月	石教研専門部会第一次研究協議会・役員研修会	研究計画、研究体制の確認
	「はまなす」No.1 発行	年間指導計画様式
5月	役員研修会、推進委員研修会①	各市町村提言予定状況の確認
6月上旬	「はまなす」No.2 発行・研究ガイド発行	各市町村提言予定状況、部会事業計画、サークル便り交流、第二次研究協議会に向けて提言の仕方提示
7月	推進委員研修会②、役員研修会	第二次研究協議会開催要項検討
	実技理論研修会（予定）	
9月上旬	「はまなす」No.3 発行	第二次研究協議会開催要項
10月	第二次研究協議会拡大推進委員研修会	第二次研究協議会開催要項確認
	石教研専門部会第二次研究協議会	授業提言、分科会交流
11月	推進委員研修会③、役員研修会	第二次研究協議会交流、アンケート見解検討、「石狩の教育」原稿検討
	「はまなす」No.4 発行	アンケート集約、見解
	管内詩集『石狩の子』原稿提出締め切り	
12月	役員研修会	次年度研究内容の立案・検討、『石狩の子』編集作業
1月	推進委員研修会④、役員研修会	次年度研究計画案内容検討
	「はまなす」No.5 発行	次年度研究計画案提示
2月	推進委員研修会⑤、役員研修会	次年度研究計画案意見集約・検討、修正
	管内詩集『石狩の子』発行	
3月	「はまなす」No.6 発行	次年度研究計画決定版・決算・教育課程委員検討内容

教育課程委員会、『石狩の子』編集委員会については、随時開催する。

（文責 山本 麻千子）